

7、目取真俊『魂魄の道』を読む

今年2月、沖縄在住の作家・目取真俊の『魂魄の道』（影書房）が刊行された。本書に収められた5つの短編に錯綜するテーマは、沖縄戦の中で沖縄の民衆が負った記憶だ。それは「被害」か「加害」かに截然と色分けできるものばかりではない。それぞれの短編には、自らの記憶の圧迫に苦しみ続ける人が出てくる。その一人ひとりの記憶を見る、聴く、読む、想像する。そういう努力なしには、直接の体験をもたない私たちに、「私」の問題とはならない。『沖縄「戦後」ゼロ年』で目取真が語ったところである。ここに私たちは目取真文学と取り組む現代的意義を認める。

① 12月23日(土) 沖縄戦の記憶に向き合う作家の想像力

講師＝越川芳明（明治大学名誉教授／アメリカ文学者）

② 2月23日(金・休) 『魂魄の道』を読む——その1

報告＝田代ゆき（近代日本文学研究）

③ 3月20日(水・休) 『魂魄の道』を読む——その2

報告＝土田宏樹（『伝送便』編集委員）